

日本語学習者や名詞修飾表現をどのように誤読しているか

リュブリャナ大学

守時なぎさ

本発表では、非漢字圏の日本語学習者が文章を読む時に、どのような点でつまずきや誤りが観察されるか、特に名詞修飾表現に注目して分析する。また、そのような学習者のつまずきに、日本語教師や研究者はどのような指導や貢献が行えるか考察する。

読解調査では、日本語学習者に通常と同じ状態で文章を読み、考えていることや行っていることを口頭で発話してもらい、それをビデオやICレコーダーで記録する。通常と同じ状態で読むということは、いつも使っている辞書やアド・オンを使いながら読むということであり、また印刷したテキストを読むかコンピュータの画面で読むかなどは学習者に任せられている。調査法について詳しくは、国立国語研究所「日本語非母語話者の読解コーパス」のホームページ(<http://www2.ninjal.ac.jp/jsl-rikai/dokkai/index.html>)を参照されたい。

さて、学習者の文章理解における問題点を分析すると、以下の三つのタイプが観察される。まず「文字」に関する問題である。これは、単に漢字の読みや意味が分からないということではなく、フォントや印刷のために漢字の字形が分からない（したがって辞書で漢字を調べることができない）、語の途中で改行されているために連語が一語として認識されない、ひらがなや漢字熟語が続いているために意味のあるまとまりが作れないなどの場合が挙げられる。この問題を防ぐために、教師は学習者に適したフォントやサイズで示したり、意味のある区切りを意識させながら読ませたりするという指導法が考えられる。

次に「命題が把握できない」という問題が観察される。述部とそれに対する格関係が把握できないというのが大きな傾向であるが、特に名詞修飾節に関しては、以下のような傾向が見られる。

- 内の関係か外の関係か分からない
- 名詞修飾節の始まりがどこか分からない

- 名詞修飾節内の要素と主文が混乱する
- 名詞修飾節が並列し、修飾関係が把握できない。

特に名詞修飾節が長くなると、名詞修飾節内の構造や並列関係の把握が難しくなる。したがって、日本語教育、すなわちレベルや母語を配慮した指導を念頭に置いた名詞修飾節のさらなる研究が望まれる一方、教師は学習者が構造を的確に把握しながら読解ができているかどうかを確認しながら読解するセルフ・モニタリングを指導する必要があるだろう。

最後に「心象表象の形成」に関する問題が指摘される。多くの研究で指摘されているように、学習者は分からなかったり読み疲れたりした場合、自分の既存の語や知識に近づけて理解するという傾向がある。この傾向は学習言語に限らず人間の一般的な性向であるかもしれない。これを未然に防ぐために、教師は語学の教育だけでなく、学習者の文化的・社会的知識を予めできるだけ拡張したり刺激したりすることによって、学習者本意ではなくできるだけテキストに沿った心象表象が形成できるよう指導することが望まれる。

発表では、学習者の読解過程に関する調査から明らかになった、文字や命題の把握、さらに心象表象の形成における問題について考察し、また教師の指導法や研究者の貢献についても提言を試みる。なお読解過程の問題は、レベルや漢字圏・非漢字圏という学習者の背景によっても異なることが予測される。さらなる調査・分析と、日本語教育・日本語学への貢献を目指して研究を進めていきたい。

この研究発表は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」と JSPS 科研費 15H01884 の助成を受けています。